

〔研究報告〕

新生児治療回復室における家族写真が家族を形成することに与える影響

坂井 洋子¹⁾ 西田 牧子¹⁾

要 旨

本研究は、新生児治療回復室（Growing Care Unit：以下GCU）で行う家族写真が家族を形成することに与える影響を明らかにすることを目的とし、第一子がGCUを退院した両親58名にアンケート調査を行った。

結果、問1「家族写真を撮影した時、楽しさや嬉しさ、わくわく感を感じた」93.3%、問2「家族写真を撮影していた時間は、家族にとって特別な時間であると感じた」95.6%、問3「家族写真を撮影して、家族3人で過ごしたいという気持ちがより強くなったと感じた」82.2%、問4「家族写真を撮影して、子どもを育てることにに対して頑張ろうと思う気持ちがより強くなったと感じた」80.0%、問5「季節の装飾と一緒に家族写真を撮影して、退院後は実際のイベントを家族と一緒に体験することを想像できた」77.8%と多くの両親が肯定的に回答した。問1～5で両親間に有意差は認めないが、問2～4では父親の方が「強く感じた」割合が多かった。また、出生週数と5問の合計点数に低い負の相関（ $r = -.305$, $p < 0.05$ ）があり、出生週数が浅い子どもの親ほど合計点数が高い傾向があった。さらに、自由記載の質問「初めて家族写真を見た時どのように感じたか」・「家族写真を見た時に両親でどのようなことを話したか」・「家族写真撮影を今後も行うことに対して良いまたは良くないと思う理由」の分析した結果、92個のコメントを抽出し、22個のサブカテゴリー、6個のカテゴリーが導き出された。これより、家族写真が家族を形成することへの影響として、アンビバレントな感情があるなかでも子どもとの触れ合いで【わが子の生きる力に感動した】だけでなく、家族3人で家族写真を撮るという一つの目的をもって協働する体験から【3人家族と親役割を認識した】こと、ほとんどの両親が【家族写真を良い経験だと思った】ことから親子・家族間の相互作用や親役割獲得などがあると考えられる。また、両親が【イベントから家族の姿を想像した】や【子どもと一緒にいたいという思いを励みにした】というように、子どもがいない場でも子どもをより身近に感じられることで心理的接触や夫婦間のコミュニケーションが生まれる機会となっており、家族3人の心理的な距離を近づけている様子があった。さらに、両親は子どもの出生前からの家族の歩みを振り返って家族で困難を乗り越えてきたことを肯定的に受け止めて励みとするだけでなく、その道りを将来の子どもとも共有したいと感じており、【過去から未来へ家族の絆を強めた】という影響があると考えられる。

キーワード：家族写真、新生児治療回復室、家族

1. 緒 言

出生後すぐに新生児集中治療室（Neonatal Intensive Care Unit：以下NICU）やGCUに入院する子どもの両親は、親役割の獲得などの発達課題が達成

できないことによる発達危機と子どもが入院する状況危機が重なり、家族を形成することが困難な状況におかれる。特に第一子誕生後の家族関係は、夫と妻の2者関係から子どもと父親、子どもと母親、そして父親と母親という3者関係へと変化し、夫婦が親という新たな役割を獲得する。そのため、家族の

1) 金沢大学附属病院

役割や関係性の変化が起こり、それに伴うストレスにより家族機能が破綻して危機的状況に陥る可能性を秘めている(鈴木, 渡辺, 2012)。また先行研究では、超・極低出生体重児をもつ両親は子ども誕生直後に「生命維持のむつかしさ」や「障がいをもつ可能性」といった子どもの予後についての厳しい説明を受けており、思い描いていた誕生の喜びとは程遠いものであったことを語り、突然の出産の衝撃に混乱し揺さぶられていた(南, 2017)。さらに、長期間の入院に伴う物理的な親子分離は、親子関係形成を阻害する(Klaus, Kennell, 1979)といわれており、発達危機に早産や低出生体重児という状況危機が重なることで家族を形成することがより困難になると考える。こうした家族への支援の一つとして、A病院GCUでは6年前より月毎に季節行事やその季節の装飾と共に家族写真撮影を行っている。これは、全入院患者とその家族を対象に家族写真撮影を提案して希望した場合、両親での面会時に装飾をGCU内の撮影したい場所に移動し、看護師が両親に撮影時の並びやポーズなどを家族で決めるよう声掛けして実施する。撮影した家族写真は印刷し、当日または次回面会時に両親に手渡す流れである。この家族写真を通した家族での触れ合いや会話などが、家族を形成することを促すのではないかと考えた。本研究は、この家族写真が家族を形成することに与える影響を明らかにすることを目的とする。

II. 用語の操作的定義

1. 家族

本研究では、第一子と両親の3人の生殖家族とする。祖父母等の定位家族は含まない。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

郵送による自記式調査紙法

2. 調査方法

1) 研究参加者

2018年3月1日～2019年3月31日に第一子がGCUを退院した両親58名。家族写真撮影については看護師から提案し、両親の希望を十分に確認したうえで実施した。看護師からの家族写真撮影の提案については研究対象者全員が希望し、希望しない両親はいなかった。

2) データ収集方法

①調査期間

金沢大学医学倫理審査委員会承認日(2018年6月20日)～2021年3月31日まで

②データ収集方法

研究参加者には、事前に電話連絡で研究の目的と倫理的配慮について説明してアンケートを郵送し、返信にてデータ収集した。

③調査内容

基本情報と家族写真撮影をした時や家族写真を見た時の気持ちについて、母親の愛着尺度日本語版(MAI-J)(中島, 2001)を参考に「とても感じた」5点～「全く感じなかった」1点とした5段階のリッカート尺度を用いた5つの質問と3つの自由記載で構成された独自の質問紙調査票にて調査した。

3. 分析方法

選択式は記述統計、自由記載は内容分析を行った。

4. 倫理的配慮

研究参加者には、研究参加・不参加への自由意思、拒否した場合も不利益が生じないことを説明した。調査票は無記名とし、調査票の返信をもって研究協力の同意とした。金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:3024-2)。

IV. 結果

1. 研究参加者の概要

対象者58名中、母親27部、父親18部の計45部を回収、回収率77.5%、有効回答率100%であった。研究協力者の子どもの出生週数は、24週1日～40週

5日（平均33週5日）であった。

2. 両親の家族写真に関する気持ちの分析

1) 家族写真に関する気持ちの実態 (図1)

問1の「家族写真を撮影した時、楽しさや嬉しさ、ワクワク感を感じた」の質問に対して肯定的な回答（「強く感じた」および「やや感じた」と回答した親、以下同様）が得られたのは93.3%であった。

問2の「家族写真を撮影していた時間は、家族にとって特別な時間であると感じた」の質問に対して肯定的な回答が得られたのは95.6%であった。

問3の「家族写真を撮影して、家族3人で過ごしたいという気持ちがより強くなったと感じた」の質問に対して肯定的な回答が得られたのは82.2%であった。

問4の「家族写真を撮影して、子どもを育てることに対して頑張ろうと思う気持ちがより強くなったと感じた」の質問に対して肯定的な回答が得られたのは80%であった。

問5の「季節の装飾と一緒に家族写真を撮影して、退院後は実際のイベントを家族と一緒に体験することを想像できた」の質問に対して肯定的な回答が得られたのは77.8%であった。

2) 基本情報と家族写真に関する気持ちの関係 (図1)

問1~5で両親間に有意差は認められなかったが、問2, 問3, 問4では、父親の方が「強く感じた」と回答する割合が多かった (図1)。また、5問の合計点数は16~25 (平均21.7)/25点と高く、出生週数と合計点数との間で相関分析 (スピアマンの順位相関) を行った結果、出生週数と合計点数には低い負の相関 ($r = -.305, p < 0.05$) を認め、出生週数が浅い子どもをもつ親ほど合計点数が高い傾向にあった (表1)。

3. 自由記述の内容分析

問6「初めての家族写真を見た時どのように感じたか」、問7「家族写真を見た時に両親でどのようなことを話したか」、問8「家族写真撮影を今後行うことに対して良いまたは良くないと思う理由」の質問に対する自由記載回答を分析した結果、両親の家族写真の受け止めについて92個のコメントが抽出され、22個のサブカテゴリー、6個のカテゴリーが導き出された (表2)。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》, コメントを〈 〉で示す。

【3人家族と親役割を認識した】

両親は、家族写真撮影時に家族3人での触れ合いを通して《家族が増えたことを実感した》ことと

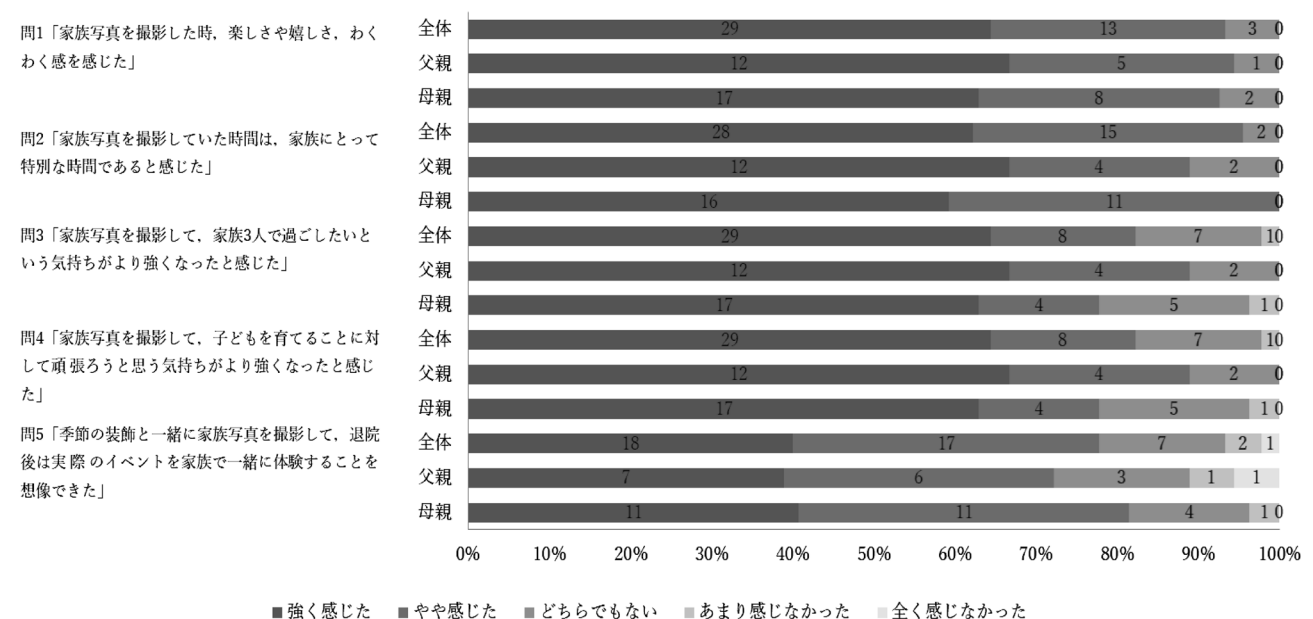


図1. 両親の家族写真に対する気持ちの実態 (N = 45)

表1. 出生週数と合計点数の相関関係

		出生週数	合計点
出生週数	相関係数	1.000	-.305*
	有意確率 (両側)		0.042
	度数	45	45
合計点	相関係数	-.305*	1.000
	有意確率 (両側)	0.042	
	度数	45	45

*相関係数は5%水準で有意(両側)

*相関係数は5%

〈父親になった事を改めて実感した〉という《親役割を認識した》ことがわかった。

【わが子の生きる力に感動した】

両親は、家族写真撮影時に〈嬉しかった〉・〈幸せな気持ち〉を感じ、《誕生を実感した》ことと《成長を実感した》ことがわかった。しかし、一方で〈わが子を見て、自分を責める時も少しあった〉という《共存するアンビバレントな感情》や、《小さいわが子への思い》を抱いていた。また、そのなかで両親は家族写真撮影で〈親としては不安な時期だったが、写真撮影時は楽しい時間を過ごせた〉というように《家族写真で安心感を得ることができた》

【家族写真を良い経験だと感じた】

両親は《家族写真撮影を発想できなかった》状況で、自身ではできないこととして《ケアとしての家族写真撮影》を肯定的に受け入れていた。また、家族写真撮影で《いい時間を過ごせた》と感じていた。

【子どもと一緒にいたいという思いを励みにした】

両親は家族写真を見ることで《家族写真に勇気づけられた》様子があった。また、〈離れている時間が長いので、写真を見ることで安心できた〉と家族写真で《わが子を身近に感じたいと思った》ことや、《家族3人で過ごしたいと思った》ことにつながっていた。

【イベントから家族の姿を想像した】

両親は、家族写真を見るときにも《3人家族を認識した》ことがわかった。また、季節のイベントと関連していることから〈家族で迎えるイベントを想像することができた〉というように《家族での日常を

想像した》機会になっていた。そのなかで夫婦間には、〈来年は一緒にお正月が過ごせる〉などのコミュニケーションが生まれ、《イベントから未来を夢見た》ことや《退院を待ち望んだ》ことにつながっていた。

【過去から未来へ家族の絆を強めた】

両親は、家族写真の現在の家族の姿から〈今日に至るまでの生活を振り返り感動した〉と《家族の歩みを振り返った》ことや、〈これから家族3人での生活についての話〉をすることで《過去から将来へと家族の姿を想像した》様子があった。また、両親は家族写真を〈後から見返した時にとってもいい思い出になった〉と《家族で頑張った記憶にした》ことや、〈いい思い出になり、良い経験ができて良かった〉・〈記憶が薄れるにつれ、さらに今回頂いた写真が大きな意味を持つと思った〉と感じて《記念・将来への思い出にしたいと思った》ことが分かった。さらに、〈GCUにいた時のことを思い出し、家族で話をすることもできた〉や、〈将来子どもにも見せることができるといった〉というように《家族の頑張りを共有できるもの》であった。

V. 考 察

家族写真撮影時に生じる家族での関わりと、家族写真をとおした家族への思いやコミュニケーションからGCUにおける家族写真が家族を形成することに与える影響を考察する。

1. 家族写真撮影で生じる家族の関わりによる影響

家族写真撮影時に生じる家族での直接的なやり取りや関わりをとおして両親は、子どもの存在の実感や安心感、親役割を認識する様子があった。これは、NICU入院期間中の超低出生体重児両親の家族形成過程について小池(2009)が第1期は、両親が喪失体験を経験しながらも子どもに出来ることを精一杯しようとしていた。第2期は子どもとのスキンシップから親と子どもの相互作用が芽生え、第3期には、子どもの世話から得られる安心と子どもの予

表2. 家族写真をおして感じた思い

カテゴリー	サブカテゴリー	自由記載	サブカテゴリー	自由記載	サブカテゴリー	自由記載
		問6「初めての家族写真を見た時どのように感じたか」		問7「家族写真を見た時に両親でどのようなことを話したか」		問8「家族写真撮影を今後行うことに対して良いまたは良くないと思う理由」
【3人家族と親役割を認識した】	サブカテゴリー	自由記載	サブカテゴリー	自由記載	サブカテゴリー	自由記載
【わが子の生きる力に感動した】	《誕生を実感した》	<ul style="list-style-type: none"> ・無事に生まれてきてくれてよかったです ・生まれてきてよかったです ・子供が産まれたことを改めて実感できた ・とてもかわいかった 	《小さいわが子への思い》	<ul style="list-style-type: none"> ・こんなにかっこよかったんだねーと話した ・赤ちゃんが小さい 	《家族写真で安心感を得ることができた》	<ul style="list-style-type: none"> ・家族が増えた ・少しでも両親が楽しめて笑顔になれる時間がある ・入院中は辛い事も多いですが、成長を感じれたり、子どもと関わりを持つことができても心の支えになった ・親としては不安な時期だったが、写真撮影時は楽しい時間を過ごせた
	《成長を実感した》	<ul style="list-style-type: none"> ・廊下に出て家族写真を撮れるまでになったなあと感じたと感じて嬉しかった 				
	《共存するアンビバレントな感情》	<ul style="list-style-type: none"> ・嬉しかった ・幸せな気持ち ・わが子を見て、自分を責める時も少しあった ・まだ気持ちの整理ができていなかった頃なので、少し複雑だった ・写真よりも子どもの事でいろいろ考える事が多かったので、特に何も感じなかった 				
【家族写真を良い経験だと思った】		自由記載	《家族写真撮影を妄想できなかつた》	<ul style="list-style-type: none"> ・家族写真をとる考えがうかばなかつた ・もっと撮ればよかった 	《ケアとしての家族写真撮影》	<ul style="list-style-type: none"> ・3人での写真は中々撮れないため（仕事中の看護師にも頼みづらいと思うので） ・入院中に自分たちで家族写真を残さないのでも
【子どもと一緒にいたいという思いを励みにした】	《家族写真に勇気づけられた》	<ul style="list-style-type: none"> ・会えない時が辛かったけど、励まされた 	《家族3人で過ごしたいと思った》	<ul style="list-style-type: none"> ・早く帰ってみんなで住みたい ・早く3人で暮らしたい ・たくさん撮っていただきた中でお気に入り写真は何れか、部屋に飾るならこれと運んだり写真立てはこんな方がいい 	《いい時間を過ごせた》	<ul style="list-style-type: none"> ・良い効果を感じた ・とても嬉しく有意義な体験だった
【イベントから家族の姿を想像した】	《3人家族を認識した》	<ul style="list-style-type: none"> ・3人家族になったのだという実感がわいた ・3人の写真を見て、初めて家族が増えたことを実感できた 	《イベントから未来を夢見た》	<ul style="list-style-type: none"> ・来年は一緒にお正月が過ごせる ・クリスマスやお正月のイベントが楽しみ 	《家族での日常を想像した》	<ul style="list-style-type: none"> ・家族で迎えるイベントを想像することができた ・入院しているとき季節感が感じられないので、イベントごとの写真はとてよかったです
【過去から未来へ家族の絆を強めた】	《家族の歩みを振り返った》	<ul style="list-style-type: none"> ・妊娠・出産を経験し、やっと会えたねえという気持ち ・今日に至るまでの生活を振り返り感動した 	《過去から将来へと家族の姿を想像した》	<ul style="list-style-type: none"> ・妊娠に至るまでの話、夫婦二人での生活とは異なるという話、今後は3人で幸せな家庭を築く話 ・これから家族3人での生活についての話 	《家族で頑張った記憶にした》	<ul style="list-style-type: none"> ・後から見返した時にとてよいい思い出になった ・退院後、半月たった今になり少し気持ちに余裕がもてる今となっては、写真を残せたことはとてもいい思い出になった
					《記念・将来への思い出にした》	<ul style="list-style-type: none"> ・いい思い出になり、良い経験ができて良かった ・母は写真を撮ってはかりで、撮ってもらう機会にはほほ無いで嬉しい、自分と子どもと一緒に映っている写真はとて貴重 ・記憶が薄れるにつれ、更に今回頂いた写真が大きなき意味を持つと思つた
					《家族の頑張り共有できるもの》	<ul style="list-style-type: none"> ・GCUにいた時のことを思い出し、家族で話をすることもできた ・将来子どもにも見せることができると思つた ・子どもが1歳になってGCUに入院していたときのことを思い出すと、またこれからも頑張ろうという気持ちになれた

後への不安というアンビバレントな感情を抱きながらも、子どもを受け入れて新たな家族を形成しようとしていたと述べている。NICUからGCUへの転棟時期は児の状態や疾患などにより異なるが、GCUで管理可能な状態の児の家族の形成過程は、上記の第2～3期にあると考えられる。GCUでは、NICUでの出生直後からのタッチングやカンガルーケアなどのような親子の愛着・関係性の形成や親役割の獲得を促すためのケアを引き継ぎながら、退院という次のステージに向けて家族を形成するための支援が重要になると考える。先行研究で関森（2002）は、早産児を持つ父親は子どもが医療機器から離脱するとたくましさを受け止め成長して行ける子どもと実感したと述べ、坂口、大平、市川（2006）らは母と子の絆を高めていくためには、児を「抱っこ」して「話しかける」ことの重要性が示唆されたと報告している。本研究でも両親は、まず家族写真撮影時に急性期を脱して状態が安定した子どもを自身の手で抱っこしたり、一緒に写真を撮ったりする直接的な触れ合いをもてることで《誕生を実感した》ことや子どもの《成長を実感した》感覚を得ていたと考える。先行研究では、親と子に関わることで親子関係を形成する（Klaus, Kennell, 1979）ことや、子どもの出生直後ネガティブな感情を持つが、子どもの状態が安定すると、子どもと関係性を形成していける（吉田、高梨、柏村、1997）と述べられており、家族写真撮影できる楽しさや喜びと家族3人の時間や空間を感じながら子どもと直接触れ合い、これらの実感が得られることは、親と子の関係を築く機会となっていると考える。また、両親は、家族写真撮影するためにどちらが児を抱っこするかや、装飾と共にどのような立ち位置にするかを相談したり、泣いている子どもと一緒にあやしたり、子どもの笑顔を引き出そうとする様子がある。これは、初めて家族3人が“家族写真を撮る”という共通した一つの目的をもち、両親・親子の3者間でコミュニケーションをとりながら協働・試行錯誤して撮影できたという達成感を得る体験であると考えられる。この関わりは、カ

ンガルーケアや抱っこのように子どもの世話や愛着形成を促すこととしての触れ合いでは得られない家族3人の関わりであり、3者の関係性をより強めることにつながると考える。また、家族写真撮影を通してこのような親子の情緒的な関わりが生まれることは、〈父親になった事を改めて実感した〉や〈3人家族になったのだという実感がわいた〉というように、【わが子の生きる力に感動した】ことや【3人家族と親役割を認識した】ことにもつながっていると考える。特に父親の《親役割を認識した》ことにおいては河本、田中、杉下（2018）が、父親になるプロセスについて、児の誕生や育児経験、周囲に父親であることを伝えたり、父親だと認識されたりといった周りとの相乗効果により父親になった実感を抱くと述べている。また、NICUにおける父親対児感情の変化を調べた研究では、子どもの受け入れがたい理由として“怖い”が最も多く、ネガティブな感情の存在が明らかになっている（三ツ木、角山、深谷、2009）。このように父親は、仕事などで面会頻度が少いため、小さい子どもとの接触への恐怖感が大きく、子どもの存在を実感することや親役割を認識することが母親より難しい状況にあると考える。本研究では、問2「家族写真を撮影していた時間は、家族にとって特別な時間であると感じた」・問3「家族写真を撮影して、家族3人で過ごしたいという気持ちがより強くなったと感じた」・問4「家族写真を撮影して、子どもを育てることにに対して頑張ろうと思う気持ちがより強くなったと感じた」の問いに対して「強く感じた」と回答した父親が多かった。これは、家族写真撮影という喜びや安心感のあるなかでの親子・夫婦の直接的な触れ合いをとおして、父親の子どもに対する恐怖感や受け入れ難さが軽減されてポジティブな対児感情が高まっているのではないかと考える。また、父親は子どもと共に過ごすなかで看護師や母親から「お父さん」・「パパ」などの役割名称で声掛けされることで改めて自身が父親であることを意識し、親役割の獲得が促されると考える。

次に、両親は《家族写真で安心感を得ることができた》一方で、《小さい我が子への思い》や《共存するアンビバレントな感情》などの相反する複雑な思いを抱いていることがわかった。先行研究でも第3期（小池，2009）や、出生後危機的状況乗り越えるまでの時期から退院が近づいて家族として子どもを迎え入れる時期のいずれも、両親は子どもの経過や予後に関して不安を抱いている（小池，2009）と述べられている。また、母親は、孤独感と満足に産んでやれなかった罪悪感で苦しみ、父親も母子に対して何も役に立つことができない自分を責めるといった感情を抱く（澤田，2002）ことも報告されている。このようなアンビバレントな感情について小池（2009）は、子どもの状態が安定すると両親は、予後への不安や障がいへの危惧などから抑うつ状態となるが、カンガルーケアから子どもの生きる力を読み取り、子どもが成長しているという実感を持ち、子どもとの相互作用から関係性を発展させ、予後への不安を断ち切っていたと述べている。また、病児を育てること、さらには免責感を持つことが親としての成長につながる（須川，2010）や、低出生体重児の親においても子どもに対して「満足に生んでやれなかった」という強い免責感を抱いていることが指摘される一方で、母親の子どもに対する免責感には、母親としての役割を促進する面もある（永田，2010）ことが報告されている。そのため、看護師は家族写真撮影時に「上手に抱っこしてもらって嬉しいね」・「コットに出て一緒に写真撮れるね」のような子どもの反応・成長を感じることができるとの声掛け、「パパが抱っこして」・「笑って、カメラの方向向いて」などの両親・親子でのやり取りが生まれるように関わり方を工夫すると良いと考える。また、両親が安心感や嬉しいというポジティブな感情を感じながら子どもと触れ合える環境を整え、両親が子どもの生きる力や成長している様子などをしっかりと実感できるようにすることにより、アンビバレントな感情を抱くなかでも親子の相互作用や情緒的な関わりで役割意識を強めていくことができると考え

る。

さらに、結果から両親は《ケアとしての家族写真撮影》を《家族3人で良い時間を過ごせた》と感じ、肯定的に受け入れていると考える。しかし、〈家族写真をとる考えがうかばなかった〉というように、ほとんどの両親は子どもだけの写真を撮ることはあるが、家族3人での写真を撮って欲しいと看護師に希望することはなく、《家族写真撮影を発想できなかった》ことがわかる。このことから、GCUという非日常的な空間において、両親が不安や入院環境・看護師への遠慮などから自ら積極的に家族写真撮影をすることは難しい状況にあると考えられる。そのため、両親はカンガルーケアなどと同様に看護師が提供するケアの一つとして【家族写真撮影を良い経験だと思った】ことがわかった。

2. 家族写真をとおした家族への思いやコミュニケーションによる影響

家族写真は写真を撮影する時の関わりだけではなく、後にそれを手にして見る時に生じる家族の関わりや過去から未来の家族への思いが生まれ、夫婦や親子など家族の関係構築を促すことにつながっていると考える。先行研究で山下（2006）は、家族写真の価値は1) イベントとしての楽しみ、2) 家族の姿の記録、3) 記憶やコミュニケーションの道具であると述べている。本研究においても季節のイベントなどに関連づけて家族写真撮影したことで、家族写真は一つのイベントとして楽しんだ記憶となっていると考える。また、2) 家族の姿の記録としての価値があるとされているように、撮影時だけでなく、両親は家族写真を見た時にも家族と一緒にいる自身の姿を客観的に見ることができ、改めて《3人家族の認識》を得る機会となっていると考える。さらに、このイベントとしての価値と家族としての認識が得られることで両親は、家族写真を見ながら〈家族を迎えるイベントを想像することができた〉と感じ、夫婦間で〈来年は一緒にお正月が過ごせるね〉などの会話があり、《家族での日常を想像する》ことや《イベントから未来を夢見る》こと、《退院を待ち望

む》ことにつながっていると考える。先行研究で森田(2020)は、家族システムやその下位システムである夫婦システムの機能を良好に維持し、親への移行にともなう発達課題を乗り越えるためには、夫婦のコミュニケーションが重要であると述べている。このことから、家族を形成することを促すうえで家族写真の記憶・コミュニケーションの道具としての価値を発揮すること、つまり、家族写真を見ながら【イベントから家族の姿を想像する】前向きな夫婦のコミュニケーションが生まれることにより、家族システムの機能や親役割の獲得を促すことにつながるのではないかと考える。

また、両親は家族写真を見て現在の家族の姿から《家族の歩みを振り返り未来の家族を描く》ことがあった。両親が家族写真を見ながらこれまでの家族を振り返る時、嬉しかった・楽しかったというポジティブな感情だけではなく、不妊治療や母親の入院などの出生に至るまでの《家族の歩みを振り返る》や、早産や帝王切開での出産、前述した第1期の家族が危機的状況乗り越えるまでの時期の辛い思いや不安・ストレス・アンビバレントな感情など様々なことが同時に想起されると考えられる。そのなかで、低出生児の親がわが子を愛せるようになるためには早期接触やスキンシップといった直接的な接触ではなく、むしろ、こうした親の敗北感、怒りや悲しみといった感情のもつれを解きながらわが子を理解することができるようになり、親子関係を形成していく(William, Jennifer, 1985)と言及している。さらに安藤(2008)は、親子の接触を物理的、直接的、身体的に触れることとしてだけではなく、心理的な接触ができることの重要性を示していると理解できると述べている。このことから、子どもの出生後も両親だけであったGCU以外の生活の場において家族写真を見ることは、〈子どもをより近くに感じられる〉や〈お気に入りの写真はどれか、部屋に飾るならこれと選んだり写真たてはこんなのがいい〉というように子どもをより身近な存在に感じることができる一つの心理的接触の機会となっている

のではないかと考える。また、多くの両親が「家族写真を撮影した時、楽しさや嬉しさ、わくわく感を感じた」ということから、両親がアンビバレントな感情や思いを想起するなかでも、当時のポジティブな印象が強く残ることで《家族写真に勇気づけられた》や《わが子を身近に感じたいと思った》、《家族3人で過ごしたいと思った》などのように、両親が子どもを家族の一員だとより強く感じ、【子どもと一緒にいたいという思いを励みにした】ことにつながるのではないかと考える。さらに、両親は子どもの出生前から退院までの道のりが《家族で頑張った記憶になった》・《記念・将来への思い出にしたいと思った》だけではなく、将来子どもが成長した時に親子で家族写真を見ながら《家族の頑張りを共有できるもの》と考えていることが分かる。以上のことから家族写真は、撮影時や撮影後すぐに見ただけではなく、《過去から将来へと家族の姿を想像する》ように、将来の家族にとっても価値のあるものとして【過去から未来へ家族の絆を強めた】ことに影響するものであると考える。結果では、出生週数が浅い子どもをもつ親ほど問1~5の合計点数が高い傾向があり、超低出生体重児での出生などのように子どもへの不安が大きい状況にあった両親ほど家族写真の影響を受けやすいことが示唆される。

先行研究で山下(2006)は、写真はそこから引き出される語りも含めて、記憶やコミュニケーションを活性化する働きが強く、現在の人間関係を促進し、自己を支える記憶を形成する働きがあると述べており、これらの写真の働きは家族を形成することを促すのではないかと考える。本研究においては、家族写真を見ることで改めて家族の認識をもつだけではなく、面会時以外の生活の場においても夫婦が家族のこれまでの過程や将来などについてコミュニケーションをとるきっかけとして、心理的接触により家族関係が促されていたと考えられる。また、そのなかで両親は、子どもと一緒にいたいという思いをより強く感じ、自身の励みや頑張ってきた証として支えとするだけではなく、将来の子どもと共有したい

というように家族3人を支える記憶となっていたと考えられる。

VI. 研究の限界と課題

本研究では、GCUを退院した子どもの両親に後ろ向きの質問紙調査を実施しており、約1年の経過の中で子どもが成長して家庭生活が安定する中で心境が肯定感を帯びたことは否めない。自由記載は文字で整理されたデータであり、家族写真撮影当時の心境や思いのリアリティが反映されていない可能性がある。今回、回収率は77%であったが、もともと家族写真に肯定的な意見を持っていた両親の意見が多く反映されて結果に偏りが出ている可能性があり、調査票の返送がなかった両親の意見にも焦点を当てる必要がある。また、研究参加依頼対象者は、遺伝子疾患や障害の有無に関係なく協力依頼をしており、疾患や障がいの有無によって意見が異なる可能性も考えられる。さらに、家族写真撮影後、家族写真について親と話をするなどの関わりはGCU全体で統一して行っておらず、そのような関わりの有無などで親の評価が異なり、結果に影響を及ぼす可能性があったことが考えられる。

VII. 結論

以上の結果より、家族写真撮影で生じる家族の関わりによる影響として、両親は、アンビバレントな感情をもちながらも子どもとの直接的な触れ合いによって【我が子の生きる力に感動した】こと、家族3人で家族写真撮影という一つの目的をもって協働する体験から【3人家族と親役割を認識した】こと、また、ほとんどの両親が【家族写真を良い経験だと感じた】ことが明らかとなり、家族を形成する過程への支援となっていると考えられる。さらに、家族写真をとおした家族への思いやコミュニケーションによる影響として【イベントから家族の姿を想像した】ことや【子どもと一緒にいたいという思

いを励みにした】ことで子どもとの心理的接触や夫婦間のコミュニケーションが生まれ、両親は家族の歩みを肯定的に受け止めて自身の励みや将来の子どもとも共有したいという【過去から未来へ家族の絆を強めた】があることが示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力頂いたご両親に心からお礼申し上げます。

各著者の貢献

HS, MNは、研究の着想や研究計画をはじめデータを分析や草稿の示唆、および全体への助言に貢献した。すべての著者は最終原稿を読み、承諾した。

利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

{ 受付 '22.03.04 }
{ 採用 '22.10.28 }

文 献

- 安藤晴美：NICUにおける定出生体重児の親子関係形成に関する看護の役割と課題，埼玉医科大学看護学科紀要，1(1)：19-25, 2008
- 河本恵理，田中満由美，杉下征子：父親になるプロセス，母性衛生，58(4)：673-681, 2018
- Klaus, M. H., Kennell, J. H. : Bonding. Maternal-infant bonding. The Impact of Early Separation or Loss on Family Development/竹内 徹，柏木哲夫訳：母と子のきずな母子関係の原点を探る，1-18, 医学書院，東京，1979
- 三ツ木愛美，角山智美，深谷悠子：NICUにおける父性育成に向けた援助と対児感情の変化，日農医誌，58：90-93, 2009
- 小池伝一：NICU入院期間中の超低出生体重児の両親の家族形成過程，日本新生児看護学会誌，15(1)：20-27, 2009
- 南 香奈：超・極低出生体重児の両親が語る家族レジリエンス，日本助産学会誌，31(2)：153-164, 2017
- 森田千穂：育児期における夫婦のコミュニケーション態度の特徴と夫婦関係満足度に及ぼす影響—1歳6か月児・3歳児を育てる夫婦に着目して，日本助産学会誌，33(3)：489-489, 2020
- 中島登美子：母親の愛着尺度日本版の信頼性・妥当性の検討，日本看護学雑誌，21(1)：1-8, 2001
- 永田雅子：周産期のこころのケア，142-154, 遠見書房，三鷹，2010
- 澤田 敬：NICU入院中の母子関係と虐待予防，Neonatal

Care, 春季増刊, 111-118, 2002
 坂口けさみ, 大平雅美, 市川元基: 母児間スキンシップが母児相互に及ぼす生理・心理的影響, 母性衛生, 47(1): 190-196, 2006
 関森みゆき: NICUにおいて早産児の父親が育む我が子との関係性, 第12回日本新生児看護学会講演集, 48-49, 2002
 須川聡子: 先天性心疾患児の母親にとっての病の経験プロセス—病児を育てる親としての変化—家族心理学研究, 24: 89-102, 2010
 鈴木和子, 渡辺祐子: 家族看護学, 178-192, 日本看護協会出版会, 東京, 2012

William A. H. Sammons, Jennifer M. Lewis/小林 登, 竹内 徹, 未熟児その異なった出発 (1): 484-494, 医学書院, 東京, 1990
 山下清美: 家族写真を撮る行為が家族にもたらす影響, 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 327, 2006
 山下清美: 思い出の共有ツールとしての写真, 人工知能学会全国大会論文集, JSAI06(0): 152, 2006
 吉田妙子, 高梨裕子, 柏村和子: 未熟児をもつ父親の心理的反應家庭の分析, 第28回日本看護学会, 小児看護, 101-104, 1997

The Effect of Taking Family Photographs on Forming a Family in the Growing Care Unit

Hiroko Sakai¹⁾ Makiko Nishida¹⁾

1) Kanazawa University Hospital

Key Words : Family photographs, Growing Care Unit, Family

This study aims to clarify the effect of taking family photographs in the Growing Care Unit (GCU) on parental feelings. We conducted a questionnaire survey on the parents who had their first child discharged from the GCU. Most parents had a positive feeling about taking and seeing family photographs. Although there were no significant differences between mothers and fathers, the parents of children born at earlier birth weeks tended to have a more positive impact. By analyzing the answers to three questions, "How did you feel when you first saw your family photographs?"-"What did you talk about when you saw your family photographs with your wife or husband?"-"Can you raise any reasons why you think it is a good or bad idea to continue to do family photographs?" Ninety-two comments were extracted, and 22 subcategories and six categories were elicited. From these results, even though they had ambivalent feelings, taking family photographs created positive feelings in the parents by interacting with their children. They were [Impressed by the power of their child's life]. Moreover, from their answers, [I recognized the role of the parent] or [Taking family photographs was a good experience], we assumed that family photographs had influenced family interaction and acquisition of parental roles.

They also commented [We imagined what it would be like as a family], [Encouraged by the desire to be with my child]. Feeling close to their children made their emotional distance closer, providing an opportunity to increase communication between the couple. In addition, parents want to look back on the path from the perinatal period of their children, accept it positively, and share it with their children in the future. Therefore, taking family photographs may have the effect of [Strengthening the family ties from the past to the future].